

キュニコス主義の生活理想

— *napaxapareu to vohiaia* —

藤井義夫

(1) キュニコス主義の生活理想

われわれがギリシャ人の倫理思想について語るとき、一般にソクラテスやプラトンなどの光背を負った「ポリスの人間の倫理學」がその根幹とみなされ、それ以外の思潮は末梢的ないし派生的なものとして、とかく蔑視され無視されがちである。そしてたとえば「コスモポリスの人間の倫理學」といったようなものがあるとすれば、それはたかだかヘレニズム時代の亞流哲學者たちの獨創性のない折衷的な思想に過ぎないと考えられがちである。もちろんそれにはそれなりの理由があるのであるが、わたしは久しくそのような解釋に疑いをもち、ギリシャ人の倫理觀の根柢にむしろかれらのコスモスへの深い觀想と共感とを見るべきであると信じてきた。そして

このような見解を裏づけるものとして、わたしはすでに二つの論文——「コスモポリテースの成立」(本誌、第二卷、第二號)と「ソフィスト・アンティプオンについて——コスモポリテースの一系譜」(『社會と文化の諸相』昭和二八年一月刊)——を發表してきたが、本稿も同じ目的にそうための一寄與である。

一 キュニコス學派について

いかなる時代の哲學についてもそうであるが、とくにギリシャ哲學においては、すでに他の場所でも觸れておいたように、その語源的關聯における志向の所在によつて、哲學 (philosophia) という言葉のなかに、およそ三

つの意味を區別することができる。その一は「自由人の一般的教養としての愛知」もしくは日常的な知識欲ないし好學心というほどの意味であつて、ヘロドトスやツキユデスなどに見出される最も原初的な用法がこれである。その二は「愛求としての哲學」(philosophia)であつて、この意味においては、ピュタゴラスの名によつて傳えられているように、知識を愛する人(哲學者)はなによりもすでに知識をもつ人(知者)から區別せられ、哲學はかりそめの有限的な生において無限の課題としての永遠の眞理を追求する努力そのものに他ならぬ。ソクラテスやプラトンの哲學はまさにそのようなものであり、それはある意味で現代の「生の哲學」に通じるものである。その三は「知識としての哲學」(philosophia)であつて、それは知識の愛求であるよりもむしろ愛求された知識そのもの、より正確には原理からの認識に基づくところの知識の體系である。アリストテレスがこのような哲學體系の創始者として哲學史上にその名を飾つたことは、周くひとの知るところであらう。現代の「科學哲學」はこのカテゴリーに屬するものといふことができる。ギリシヤではじめて造語せられそして慣用されてきた

philosophia という言葉が、このような三つの意味に區別されうるならば、われわれがギリシヤの哲學者たちに接近し、かれらからその精神的遺産を受け取る態度にもそれらに對應した三つのものが必要となるであらう。

キュニコス學派はいわゆる「小ソクラテス學派」の一つとして知られている。かれらはソクラテスの衣鉢をついで、妥協のないひたすらな「愛求の哲學」を追求し、師の教説を一面的ではあるがよりソクラテスの的に實踐した。けれどもかれらは言葉の嚴格な意味でのソクラテス的生活の傳導者であり、生の哲學者ではあつても、決してプラトンのようなソクラテスの體系の祖述者ではなかつた。したがつてわれわれはそこから哲學的生の自覺に徹しようとした「キュニコス的生活」(euzēteōs bios)の智慧を汲むべきであつて、かれらに獨立的なキュニコス哲學の論理を求むべきではないであらう。

ところでキュニコス學派に屬する哲學者たちのうち、最も有名なものは、いふまでもなく、シノベのディオゲネスであるが、かれはアンティステネスの弟子であり、またクラテスの師であつて、われわれはこれらの三人をキュニコス學派の代表者に數えることができる。すなわち

(3) キュニコス主義の生活理想

アンティステネスはこの學派の始祖であり、ディオゲネスはキュニコスの奇行と寸鐵人を殺すような警句をもつて、ギリシャ世界を震撼せしめ、クラテスはキュニコス主義の教説をストア學派の創始者ゼノンに傳承した。しかも、さきに述べたように、アンティステネスはソクラテスの弟子であったのであるから、キュニコス學派はソクラテス主義とストア主義との媒介者として哲學史上にその名をとどめている、というのが通説である。

しかしディオゲネス・ラエルティオスの報告を基礎にしたこのような主張に對しては、すでに古代から若干の疑義が提起せられている。それは主として同じく倫理の問題に焦點を合せながら、キュニコス主義の本質をアンティステネス的な思想傾向に置くか、それともディオゲネス的な生活態度に求めるか、の相違に歸着するようである。というのは、アリストテレスも證言しているように、アンティステネスは論理に對して獨自の見解をもち、同一判斷のみを可能と考え、またかれの著作目録が示しているように、ホメロス解釋、とくに「オデュッセウスについて」ことさらなる關心をもち、また辯論術ないし修辭學についても著述しているほどであるが、ディオ

ゲネスは論理學的な研究に専念するひとびとを侮蔑し、さらに「文法家がオデュッセウスのもろもろの災厄をたねんに研究しながら、自分の災厄に無知であるのは驚くべきことだ」と言い、また「辯論家が正義について諤々の議論をしながら、少しもそれを實行しない」と非難しているからである。のみならず、アンティステネスはさやかながらも自分の家や家具や寢臺をもち、ソクラテスとともにアテナイの富豪の饗宴に加わり、ソプラテたちの講筵にも列したけれども、ディオゲネスは野に臥し樽に住む乞食の生活を送った。そしてかれによって行ぜられたいわゆる「キュニコスの生活」はその大膽さにおいて同時代のひとびとの耳目を聳動せしめたが、かれは少しも意に介しなかった。

しかしアンティステネスとディオゲネスとのこのような性格上の對立は、前者をキュニコス主義の系列から除外せしめる充分な理由とはなりえないように思われる。なぜならば人間の景仰に價するのは徳のみであり、文化や傳統——*dogmas*——の名において失われた人間の本来の相——*phases*——を顯現せしめることを哲學の使命と觀じたキュニコスの教義は、外ならぬアンティステネス

によって與えられたものであり、この精神的基礎の上においてのみ、ディオゲネスのかずかずの無恥の所業も、價値あるものとなるのだからである。そしてたとえ、アリストテレスがアンティステネスの弟子たちを *Araboi* (アンティステネスの徒) と呼び、*kyrroi* (キュニコスの徒) と呼ばなかったのは、むしろ當時未だこの言葉が常用されるほど熟していなかったとみることもできるであろう。したがってソクラテス—アンティステネス—ディオゲネス—クラテス—ゼノンの系列にみられる「キュニコス學派の繼承」に對して、異をさしはさむ充分の理由をわれわれはもたないように思われる。

- (1) 拙著、『哲學の誕生』九頁以下参照。
- (2) Diogenes Laertius, VI 2.
- (3) *Metaphysica*, V 29, 1024 b 32—34, *Topica* I 11, 104 b 21.
- (4) Diog. Laert. VI 15—18.
- (5) Diog. Laert. VI 24, 27, 28.
- (6) *Metaph.* VIII 3, 1043 b 24.
- (7) D. R. Dudley; *A History of Cynicism*, 1937, p. 2 ff. わたしはこの意味でキムナリーの解釋に同意することができなす。

二 「キュニコスの生活」について

ところで「キュニコスの生活」とは何であろうか。これらがとくに「キュニコス」と呼ばれたのは何故であろうか。「キュニコス」とは、いうまでもなく、名詞 *kyon* (犬) からきた形容詞——*kyonikos* (犬のような)——である。現代語の *cynic*, *zynisch*, *cynique*, *cinico* などの原語である。わが國においてキュニコス學派が「犬儒學派」と譯されているのもその理由からであると思われる。ディオゲネス・ラエルティオスはこの名稱の由來について、次のように語っている。

「かれ(アンティステネス)はアテナイの城門にほど近いキュノサルゲス (*Kynosarges*)——白い犬の意——の體育場で(門人たちと)談話するのをねとしていた。だからそこからキュニコス學派 (*kyonikoi*) と名づけられたと解するひとたちもいる。アンティステネスその人もハプロキエオン (*Haplokyon*)——單純な犬の意——と渾名をつけられた。」

アカデメイアやストアなどの例にみられるごとく、學派の名をその學園の所在地もしくは利用された建物の呼

び名からとることは、決して珍らしいことではない。しかしキュノサルゲスについては、ディオゲネスやクラテスなども全く言及していないし、「キュニコス」という名稱はこの學派のより本質的な生活態度を表現しているものと思われるから、地口に近いこの類推はにわかには信じがたい。むしろこのような地名との一致は單なる偶然とみるべきであろう。

アリストテレスの古註によれば、かれらが「キュニコス學派」と呼ばれた理由には四つある。第一は、かれらの生活態度の無頓着さから (*Oia te daitopou*) きている。というのはかれらはなにも無頓着であること (*daitopou*) に心がけ、犬のように、公衆の面前で喰い、情事を行い、裸足で歩き、樽のなかや四辻で寝たからである。しかもかれらは本性上美しいものを希求して、こうしたことをやっただのである。第二の原因は、犬は恥を知らぬ動物であるが、かれらも恥知らず (*aitheia*) を恥を知ること (*aitheia*) よりも劣ったものではなく、むしろそれに優越したものとして、それに心がけたからである。このように無恥にもよりよきものとより悪しきものとの二義が存在している。第三の原因は、犬はよく番を

する動物であるが、かれらも論證によって自分の哲學上の教理を見守り、そしてそれを誇りとしていたからである。第四の原因として、犬は敵と味方とを見分けることのできる利口な動物であるが、かれらも哲學に適したひとびとを味方として認め、親切に遇するが、哲學に適しないひとびとには、犬のように、吠えついてかれらを追いやるからである。⁽²⁾

アンティステネスは後にキュニコスの裝束となった「襦袢衣 (*chiton*) を二つ折りにして、それだけをまとい、杖をつき、頭陀袋を背負った最初の人」であり、またかれはディオゲネスの平常心 (*aitheia*) とクラテスの克己心 (*epareia*) とゼノンの不動心 (*katareia*) との先驅者となった。⁽³⁾ けれども、文字通り「犬のような」生活を實踐し、それによってこの學派の象徴的な哲學者となったのはディオゲネスであろう。⁽⁴⁾ デイオゲネス・ラエルティオスやその他多くの傳記作者によって傳えられている著名な数多くの逸話は、それが歴史的にどれほどの眞實性をもつかは疑問であるにしても、かれの生活態度を如實に物語っている。⁽⁵⁾ それはおよそ次のごとくである。

かれは自分のことを「たれでも褒めてはくれるが、一

緒に獵に伴って行こうとはしない犬だ」と言った⁽⁶⁾。

或るとき、子供が(務問用の)杭に石を投げてゐるのを見て、かれは言った。「うまいぞ、標的に當るだろうからな。」子供たちがかれの傍に寄ってきて言った。「おまえはぼくたちに噛みつくことはないだろうね。」「大丈夫だよ、犬は青菜(vegetables)など喰いはしないさ」とかれは言った⁽⁷⁾。

或る宴會の席でひとびとがかれに、まるで犬にやるように、骨を投げてやった。そこでかれは立ち去るときに、犬のように、かれらに小便をひっかけた⁽⁸⁾。

どのような種類の犬かと聞かれて、かれは答えた。空腹のときは狎犬(Mastiffs)だが、満腹のときは狼犬(Mastiffs)だ⁽⁹⁾。またどんなことをして犬と呼ばれるのかと訊ねられたとき、「なにか呉れるものには尻尾を振るが、なにも呉れないものには吠えつき、悪い奴には喰いつくからだ」と答えた⁽¹⁰⁾。

かれが市場で朝食を喰べていると、かれの周圍に集つてきたひとたちが「犬だ」と言った。するとかれは「おまえたちこそ犬だ、飯を食うものの周りに立っているなんて」と言った⁽¹¹⁾。

これらの逸話は、當時のひとびとがディオゲネスを「犬」として遇し、かれもまたその呼稱に甘んじ、一般市民の虚飾と偽瞞にみちた生活の番犬たることを自己の天命と観じていたであろうことを物語っている。われわれは「キュニコスの生活」をより具象的に知るために、煩をいとわず、ディオゲネス・ラエルティオスから、もっともキュニコスと思われる逸話の引用を、内容的にはやや不統一であるが、かれの順序にしたがって、しばらく續けてみよう。

かれは或るとき、鼠が駆けまわり、寢床も求めず、暗闇も怖れず、美食と思われるようなものを少しも望まないのを見て、自分を環境に適應させる方法をそこに發見した。かれはそのなかで寝るために襦袢を二つ折りにし、食料を入れるために頭陀袋をたずさえ、朝食をとったり、眠ったり、對談したりするのにあらゆる場所を利用した。そしてかれはゼウスの柱廊や議事堂を指さして、「アテナイ人どもはおれのために住む家を用意してくれた」と言うことをつねとした。

かれは自分のために小屋を心配してくれるよう或るひとに書き送ったが、そのひとが躊躇していたので、メトロオンにあった樽を自分の住居にした。そして夏は熱い砂の上でそれを轉がし、冬は雪に覆われた彫像を腕に抱き、あらゆる苦行

によって自分を鍛練した。

或るときプラトンが豪華な宴會でオリヴに手をつけているのを見て、ディオゲネスは「賢者のおまえさんがシケリアへ渡ったのは、このようなご馳走のためだったはずだが、今それが眼の前に並べられているのに食べないのはどうしてだね」と言った。するとプラトンは「いや、とんでもない、わたしはあちらでもたいがいオリブとかそんなもので暮らしていたのだよ」と答えた。するとディオゲネスは「では、何のためにシヌラクサクんだりまで行かねばならなかったのだ、それともその頃アッティケにはオリブがならなかったのかね」と言った。また或るときディオゲネスが乾した無花果を喰べていて、プラトンに出會ったので、「少し取ってはどうかね」とそれを差し出した。プラトンがそれを取って食べる、ディオゲネスは「わしは少し取ってはと言ったが、それを食べてしまえとは言わなかったはずだよ。」

またプラトンは或る日、ディオニシオス王の許からやってきた友人たちを招待していた折に、ディオゲネスがそこへ入ってきて、敷物に躓いて言った。「おれはプラトンの自惚に躓いた」。プラトンはそれに對して「ディオゲネス、おまえさんは自分を高慢でないと思うことによって、なんと高慢を曝け出していることだろう」と答えた。

ギリシャのどこかで美人を見たかと訊ねられて、かれは答えた。「ギリシャのどこにも美人はいなかった。ただスバル

タに善い子供がいただけだ。」
或る日、かれは大眞面目に説教をしていたが、たれもやめてこなかったので、いきなり口笛を吹き始めた。するとひとびとがかれの周りに集ってきたので、無駄な話には眞面目にやってくるが、眞面目な話にはぐずぐずしている、とかれは文句を言った。

ディオゲネスが海賊に捕われて、賣りに出されたとき、「お前には何ができるか」と訊ねられた。かれは「人間どもを支配することだ」と答えた。そして競賣人に「もしたれか自分のために主人を買いたいと思うひとがあったら知らせてくれ」と言つて（腰を下ろした）。腰を下ろすことは禁じられていたが、かれは「なに構うものか、魚はどのように並べられても、買手はつくものなんだから」と言った。そして「われわれが壺や皿を買うときにはその音を試めしてみるのは、人間を買うときには、ただ見るだけで満足しているのは不思議なことだ」と言つた。かれを買つたクセニアデスにディオゲネスは言つた。「わしは奴隷ではあるが、あんたはわしに従わねばならん。というのはもし醫者とか舵取とかが奴隷だったら、あんたはかれの言うことをきくだろう。」

また別傳によれば、かれが奴隷に賣られたとき、かれは最も高貴な心をもってそれに耐えた。というのは、かれがアイギナにむかつて航海していたとき、スキルバロスを頭目とする海賊の一團に捕えられ、クレテに連れてゆかれ、賣りに出された。競賣人に「おまえは何ができるか」と訊ねられたの

で、かれは「人間を支配することだ」と答えた。そしてかれは着物に見事な縁取りをした或るコリントス人、つまり、前述のクセニアデスを指して、「こいつにおれを賣ってくれ、この男は主人が必要だ」と言った。クセニアデスはかれを買ひ取って、コリントスに連れてゆき、自分の子供たちの監督をさせ、家事一切をかれに委せた。かれはそれを萬事について大へんうまく處理したので、クセニアデスは「わたしの家に福の神が舞い込んだ」と言つてふれ廻つたほどであった。

ディオゲネスの友人たちは(身代金を拂つて)かれを自由の身にしてやろうとしたが、かれはかれらをお目出たい連中だと言つた。というのはライオンはそれを飼育しているものの奴隸ではなくて、むしろ飼育しているものの方がライオンの奴隸だ。なぜかというに、恐怖は奴隸の證據であるが、その獣は人間どもを恐怖させるからだ。

或るひとがかれのところで哲學の勉強をしたいと頼んだ。ディオゲネスはその男に一びきの鮪を興えて、自分の後からついてこいと言つた。かれは恥かしさのあまり、鮪を投げ出して逃げて行つた。しばらくしてディオゲネスがかれに出會つたとき、笑いながら「おまえとおれとの友情は鮪一びきでこわされたな」と言つた。

或る日、子供が手で水を飲んでゐるのを見て、「簡易な生活では子供の方がう手だつた」と言いながら、頭陀袋から水飲みを取り出して投げ捨てた。同様にしてまたかれは皿を割つた子供がパンの窪みに扁豆を入れてもらつてゐるのを見

て、自分の腕さえも捨ててしまつた。

プラトンが「人間とは二足にして羽根なき動物なり」と定義して喝采を博していたとき、ディオゲネスは鶏の羽根をむしりとして、それをもつて講義の部屋に入つてきて、「これがプラトンのいう人間だ」と言つた。そこでプラトンはその定義に「平たい爪をもつた」という言葉をつけ加えた。

いつ食事をしたらよいかと訊ねられて、かれは「もし金持なら、好きなときだし、もし貧乏人なら、できるときだ」と答えた。

かれは白晝ランプを點して「おれは人間を探してゐるんだ」と言いながら、街を歩いた。

或る日、かれはずぶ濡れになりながら立っていた。傍に立っていたひとびとが氣の毒がっていると、そこに來かかったプラトンが、ディオゲネスの虚榮心を諷しながら、「もしほんとうにかれを氣の毒に思ふのなら、あなたがたはここを立ち去らなくてはいけない」と言つた。

藥屋のリュシアスが「君は神々を信じてゐるか」と訊ねたとき、かれは答えた。「わしはあんたを神々の敵だとみなしているのだから、どうしてわしが神々を信じないなどということがあろうか。」

齋戒沐浴をしてゐる或る男を見て、かれは言つた。「不幸な奴だ、齋戒沐浴をしたところで、文法の上の間違を避けることはできぬと同様に、生活の上の間違も避けることができ

ぬことを、おまえは知らないのか。」かれは祈りに關しても、ひとびとがかれらに善いと思われるものを願って、眞實善いものを願わないと言つて、かれらを非難した。また夢見について騒ぎ立てるひとびとに對しては、かれらが目覺めてゐるときやつたことには少しも注意を拂わないのに、眠つてゐるとき見たことにはひどく氣を使うものと言つた。

オリヌムビアで報告者が「ディオクシッポスが他のひとびとに勝つた」と告げたとき、ディオゲネスはそれに抗言した。「この男が勝つたのは奴隷ども (δούλοισι) だ、人間ども (βούλοισι) に勝つたのはおれだ。」

奴隷はなぜ「人足」(ἀνθρώποι) と呼ばれるのかと聞かれて、「かれらは人間の足 (ἄρα ἀνθρώπων) をもっているが、魂はいまわしに訊ねてゐるおまえさんのようなのしかもたないからさ」とかれは答えた。

或る日、寶物の茶碗を盗んだ男を寺の役人が引き立て、ゆくのを見て、かれは「大泥棒どもが小泥棒を引き立て、ゆくい」と言つた。

ヘゲシアスがかれの書いた書物のどれかを貸してくれ、とかれに頼んだとき、かれは言つた。「馬鹿な奴だな、ヘゲシアス、おまえは繪に描いた魚よりもほんものの魚を選ぶくせに、眞の鍛練は素通りして、あわてて字に書いた鍛練を望むなんて。」

或る時、かれは彫像の施しを乞うた。何のためにそんなものを欲しがるのだと問われて、「斷られるのを練習するの

だ」と答えた。たれかに施しを乞うときには——このことを最初かれは貧窮のためにやつたのだから——かれは言つた。「もしほかの人に恵んだことがあるなら、おれにもおくれ、もしなければ、おれから始めてくれ。」

ディオニシオス王は友人たちをどのようによつたかと思つて、かれは答えた。「財布のようになだ、なか一杯のときはそれらを掛けておくが、空になると投げ出してしまふ。」

プラトンがイデアについて對話して、机自體や杯自體という名で呼んだとき、ディオゲネスは言つた。「プラトン、わしは机や杯を見るけれども、机自體とか杯自體を少しも見ることができない。」それに答えてプラトンは「いかにももつともなことだ、あんたは机や杯を見る眼はもつてゐるが、机そのものや杯そのものを眺める理性をもち合わせてゐないのだから」と言つた。

「ディオゲネスをどんな人間だと思ひますか」と訊ねられて、プラトンは「氣の狂つたソクラテスだ」と答えた。

「生きることは悪だ」と言つたひとにむかつて、「生きることはそのものではなく、悪く生きることがそうなのだ」とかれは言つた。

「何故ひとびとは乞食には恵んでやるのに、哲學者には恵んでやらないのか」と聞かれて、「かれらはいつか跛者や盲目にはなることがあるかも知れないが、よもや哲學者になることがあろうなどは豫期しないからさ」とディオゲネスは答えた。

或る拜金宗の男に物乞いをしていたが、ぐずぐずして遊んでいるので、かれは言った。「旦那、わしが願っているのは、食いもの (pouqin) なんです、葬式代 (caisy) じゃありませんぜ。」

或る日かれが市場で飯を食ってのを非難されて、「わしは市場でひもじくなつたからさ」と言った。

またかれは次のような論法を引き合いに出した。

もし朝食をとることがおかしくなければ、

それを市場でとつてもおかしくはない。

しかるに朝食をとることはおかしくはない。

故に市場でそれをとつてもおかしくはない。

或るひとがサモトラケの (神殿への莫大な) 奉納物に驚歎したので、かれは言った。「もし救われなかつたひとびとが奉納したとすれば、それはもつと澤山だつたらう。」

氣むづかしい男に物乞いをしたところ、その男が「もしおまえがわたしを説き伏せたらやろう」と言ったので、ディオゲネスは「わしがもしあんたを説き伏せることができたなら、わしはあんたに首をつるように説得したらう」と答えた。

オリュムピアから歸つてきて、「群衆は大勢でしたか」と訊ねられたので、かれは「群衆は大勢だつたとも、だが人間はあまりいなかつたよ」と言った。

かれは無花果の樹からその實を集めていた。番人が「その樹で最近ひとが首をつつたんだぞ」と言うので、ディオゲネスは「だからおれがそれを清めてやろう」と言った。

かれは哲學からどのような利益をえたかと問われて、「他のことは別として、少くともどのような運命に對しても心がまえができてゐることだ」と言った。

「あんたはどこからきたのですか」と聞かれて、「わしは世界の市民 (koinonikis) だ」と答えた。

「あなたは哲學者のくせに、なにも知らない」と言つたひとに、かれは「たとえわしが知識を裝っているにしても、それもやはり哲學なのだ」と言つた。

或るひとが子供を連れてきて、「この子は大へん利口でまた人物もとてもしっかりしています」と言つたとき、「では、あんたはなぜわしを必要とするんだ」とディオゲネスは言つた。

「わたしは哲學をやるには適しない人間です」と言つた男にむかつて、「おまえさんがよく生きようと心がけないのなら、そもそも何のために生きてゐるのだ」とかれは言つた。

死は悪いことか聞かれて、「それが現にあるとき、われわれが意識しないようなものが、どうして悪いことがあるうか」とかれは答えた。

教育とは若者たちには節制であり、老人どもには慰藉であり、貧者どもには財産であり、金持どもには裝飾である。

ディオゲネスがクラネイオンで日向ぼっこをしていたとき、アレキサンドロスがかれの傍に立つて言つた。

「余は大王のアレキサンドロスである。」

「わしは犬のディオゲネス (Dioskyris o kyon) だ。」

(11) キュニロス主義の生活理想

- 「汝は余がおそろしくないか。」
「あんたは一體何ものだ、善人かそれとも悪人か。」
「善人である。」
「では、だれが善人をおそれるか。」
「汝の欲するものを申してみよ。」
「わしの日陰にならぬようにしておくれ。」
かくてアレキサンドロスは「もし余がアレキサンドロスでなかつたならば、ディオゲネスになることを望んだらう」と言つたと傳えられている。
- (1) Diog. Laert. VI 13.
(2) Scholia in Aristotelem. coll. Chr. A. Brandis (Aristotelis Opera ed. Acad. Reg. Borus. Vol. IV. Berlin. 1836) 23 a. 42—b. 21.
(3) Diog. Laert. VI 13, 15.
(4) プリモトテトスはディオゲネスを *o Krow* と呼んで *59° Rhetoria* III 10, 7. 1411 a. 24.
(5) H. Gomperz; Die Lebensauffassung der Griechischen Philosophen und das Ideal der inneren Freiheit³ 1927. S. 128. Von diesen Geschichten nun kann kaum eine einzige als unbedingt glaubwürdig gelten. Dennoch darf, wie ich glaube, an der geschichtlichen Treue des Bildes, das sie in ihrer Gesamtheit uns zeigen, nicht gezweifelt werden: so lebensvoll und fest umrissen ist es.
(6) Diog. Laert. VI 33.

- (7) Diog. Laert. VI 45. 61. 二人の臆病者が(ディオゲネスを見て)こそこそ逃げ出したので、かれは言った。
「怖れることはないぞ、犬は青菜など喰いはしないさ。」
(8) Diog. Laert. VI 46.
(9) Diog. Laert. VI 55.
(10) Diog. Laert. VI 60.
(11) Diog. Laert. VI 61.

三 いわゆる「賈金づくり」について

上に引用された数々の逸話のなかに端的に示されているところの「キュニロスの生活」から、われわれははたして何を學ぶことができるであろうか。それについて最も興味深く、かつ、示唆にとむのは、この「犬のような哲學者」についで傳えられている「貨幣の改鑄」(*αγακαρτερων τῶ νόμισμα*)³ といふ「賈金づくり」の問題である。

ディオゲネス・ラエルティオスはそれを次のように報告している。

ディオゲネスは兩替商、ヒケシオスの子、シノペの生れである。ディオクレスの傳えるところによると、かれの父親はその市の公金を委託されていたが、賈金をつく

つたので、かれは追放された。またエウプウリデスは『ディオゲネス論』のなかで、ディオゲネスが自分でそれをやって、父親とともに亡命せざるをえなかった、と言っている。しかのみならず、かれ自ら『ポルタゴス』という書物のなかで、貨幣を改鑄した (*ταρταροποιῶν νόμισμα*) つまり贋金をつくったことを告白している。また或るひとびとの語るところによると、かれは職工どもの監理人に任命せられ、かれらに (贋金づくりを) 勧められたので、デルプオイに、あるいは生都 (シノペ) のデロス神殿に赴いて、自分が勧められたようなことをやったものかどうかを、アポロに聞いたのだした。ところが *Kolktroú boukura* (法貨と社會秩序の二義をもっている) の改鑄を許されたので、かれはその意味を理解しないで、鑄貨を偽造したところ、露顯して、或るひとの説によれば、かれは追放され、他の説によれば、その結末を憶れて自發的に逃出した。さらに別の傳承によれば、かれは父親から委託された貨幣を臺なしにしたので、父親は捕われて獄死し、息子は追放されデルプオイにやってきて、贋金をつくるかどうかをではなく、どうすれば最も有名になれるかを訊ね、その結果あのような神託をえた、とい

うのである。⁽¹⁾

すでに述べたように、上に擧げたさまざまな逸話は、ディオゲネスのキニコスの人間類型を物語る寓話とみられるのであるが、すなわちかれとプラトンとの對話は、犬儒的なそして即物的な哲學者と貴族的なそして觀念的な哲學者との對照を具現しようとした小話であり、またクセニアデスと「ディオゲネスの賣物」の挿話は、主人と奴隸との價値の顛倒を、さらにアレクサンドロスとディオゲネスとの問答は政治的な世界支配者と人間的な世界支配者との價値の秩序を象徴しようとした創作であるが、われわれはディオゲネスの「贋金づくり」の傳承からも、そこに寓せられた意圖をあやまりなく汲まねばならぬ。

かれが「貨幣の改鑄」についてデルプオイの神託を仰いだことは、われわれにソクラテスの同じ物語を想起させる。周知のように、ソクラテスの友人カイレブオンは、デルプオイに行つて、ソクラテスより以上の知者がいるかどうかを訊ね、かれ以上の知者はいないという神託を受け、そこからソクラテスの逆説的な「無知の知」の探求が始まり、「助産婦」 (*maieutiké*) であったかれの母の

職業に即して、かれの哲學の方法が「助産術」(μαστική)と呼ばれたのであるが、ディオゲネスについても、かれの父親が公職をもった市の有力な銀行家であり、その職業から *κατακαίτερον το νόμιμον* が作爲され、デルフォイの神託を通じて、かれのキュニコスの使命がそれに假托されたとみることもできるからである。そしてそのことはキュニコス學派がアンティステネスを媒介として直接ソクラテスに結びつくことから容易に納得しうるであらう。

しかしたとえわれわれは現在それを歴史的事實によって實證するあらゆる手段を缺いてにしても、ディオゲネス・ラエルティオスが傳えているように、「貨幣の改鑄」をディオゲネスが『ポルタロス』において自ら告白していることが事實であり、またアテナイに亡命して、「犬」(ὁ Κυναι) という呼稱をもってひとびとから敬愛せられ、アリストテレスによってすらそのように呼ばれたことを疑いえないとすれば、さきのディオゲネスの傳記は或る程度の歴史的な眞實さをもつものと言ふことができるであらう。そしておそらくこのような亡命生活におけるさまざまの苦難が、かれを「キュニコスの生活」

への回心へと動機づけたであらうことは、ディオゲネス・ラエルティオスの次のような報告からも明らかである。

かれはあらゆる悲劇の呪詛がわが身に降りかかったと言ふことをつねとした。

住むに都邑なく、家もなく、

祖國を離れ、いやはてに、

われ日々の糧を乞う

さすらい人よ、布衣の人

かれを追放者だといって非難したひとにかれは言つた。「やい、罰あたりめ、そのためにこそおれは哲學者になれたんだぞ。」またたれかが「シノベの連中はおまえに追放の宣告をしたんだぞ」と言つたとき、「おれの方こそあいつらに禁足を宣告したんだ」とかれは答へた。⁽⁵⁾

或るとき通貨を偽造したことを非難されたので、かれは言つた。「あの頃はおれも今のおまえさんのような、そんな男であつた時分のことだ。だがおまえさんは今のおれのような、そんな男になることは決してあるまい。」⁽⁶⁾かれはアテナイにやってきて、アンティステネスの門

を叩いた。ところが弟子などを歓迎しないという理由で入門を断られたので、強引にねばって居催促をした。或るとき、アンティステネスがかれに鞭を振り上げたところ、かれは頭を差し出して言った。「どうぞ殴って下さい。どんな木でも、わたしが先生のお言葉をはっきりお聞きするまでは、わたしをここから追拂うことができるほど堅くないことがおわかりでしょうから。」その時以來かれはアンティステネスの弟子となり、そしてかれは追放者であったが、そこで簡易生活への第一歩をふみ出した。

しかしディオゲネスが故郷のシノペで、父親とともに賈金をつくり、そのために追放となり、アテナイにきてアンティステネスの門に入ったというディオゲネス・ラエルティオスの報告が、史實としてはたして正しいかどうかを仔細に吟味することは、われわれの當面の任務ではない。われわれにとって興味があるのは *καταχαρτικῶν τῶν νόμων* という言葉のもっている別の意味である。それはデルプオイの神託によって「*τὸ νόμισμα νόμισμα*」の改変を許されたので、かれはその意味を理解しないで (ὁ νόμισμα) 鑄貨を偽造した」というさきに引用された

箇所においても豫示されていることであるが、ディオゲネス・ラエルティオスは他の場所で、さらにその意味を次のように敷衍している。

ディオゲネスの言うところによると、人生において一般にいかなるものも鍛練することなしには成功しない、鍛練こそはすべてのものに打ち克つことを可能にする。したがって幸福に生きるためには、役に立たぬ苦勞の代りに、自然にしたがった (*κατὰ φύσιν*) ものを選ばねばならぬ。無知だと、ひとは不幸に見舞われる。というのは快樂を輕蔑することは、ひとが心がけてそれに慣れると、それ自體最も快的なものだからである。そして快的な生活に慣れたひとびとも反對のものに移行すると、不快になるように、それと反對の鍛練をへたひとびとは快的なことがらを輕蔑することによって、快樂そのものよりもより多くの快感をもつ。かれはこのように語り、そして慣習にしたがった (*κατὰ νόμον*) ものに自然にしたがった (*κατὰ φύσιν*) ものほどの權威を與えないで、ほんとうに通貨を改変しながら (*ὄντως νόμισμα καταχαρτικῶν*) はっきりこのように行動した。そしてなによりも自由を選びとるヘラクレスと同じような生活態度を主張

した、といわれる⁽⁸⁾。

いうまでもなく *nomisma* は *nomos* と同根の言葉であり、もともとそのものの本質によって自然的にはなく、⁽⁹⁾ 社會生活の便宜によって慣習的に認められたものであり、したがって社會秩序を維持するために必要とされたものである。そしてさらに經濟生活の成立の條件となる物質の交換を可能にするために、それが流通社會に適⁽⁹⁾用されるとき *nomisma* は貨幣となる。なぜならばアリストテレスが言っているように、「貨幣はいわば契約にもとづく需要の代表者」であって、それはたとえわれわれが現在には必要としなくても、もし必要が生じたときには入手できるという未來の交易のための保證だからである。すなわち貨幣は價值の尺度であり、すべてのものを通約的とすることによって均等化し、もって經濟的な流通關係を成り立たしめる。そして貨幣がこのように需要への關係から契約にもとづいて (*kata outheian*) あるいは協定によって (*estiradiceas*) 生じるがゆえに *nomisma* と呼ばれるのである。ただしそれは自然的 (*phuse*) ではなく人為的 (*techné*) であり、それを變更することをも、不用にすることもわれわれの自由だからである。

ところでディオゲネスがこのような意味での貨幣の改鑄を企て、賈金を作ったかどうかには疑いがあるが、四世紀のギリシャ人、とくにアテナイ人たちの間に常識として通用していた風俗や慣習や信仰を打破し、不撓の意志と俊敏な知性によって、自然人としての新しい生活秩序を求め、哲學の探求と實踐とに新しい道を拓いたことは、後人のひとしく認めざるをえないところであろう。それはニーチェ的に言えば「あらゆる價值の顛倒」(Umwertung aller Werte) であり、このことがまさしくディオゲネスの *κατακρίσεν τὸ νόμισμα* の意味なのである。

(1) Diog. Laert. VI 20, 21.

(2) ディオゲネス・ラエルティオスの外に、たとえば Plutarchus: Vitae parallelae. Alexander 14 を見よ。人口に膾炙しているディオゲネスとアレクサンドロスとのこの問答は、時代的にも場所的にも、また師アリストテレスの教訓を無視して世界征覇を夢みたアレクサンドロスの性格からも、全く信じがたい。それはほとんど論證の必要がないはずである。P. Natorp: Art. in Pauly-Wissowa. Realencyclopädie der Classischen Altertumswissenschaft. V. 1. S. 767.

- (3) Iulianus, In Constantii laudem Oratio. VI 188.
H. Diels; Aus dem Leben des Cynikers Diogenes.
(Archiv für Geschichte der Philosophie. Bd. VII,
1894) S. 314 ff. E. Schwartz, Charakterköpfe aus der
Antike, hrsg. v. J. Stroux 1943. VI Diogenes der Hund
und Krates der Kyniker. S. 125.
- (4) Diog. Laert. VI 38.
(5) Diog. Laert. VI 49.
(6) Diog. Laert. VI 56.
(7) Diog. Laert. VI 21.
(8) Diog. Laert. VI 71.
(6) Ethica Nicomachea. V 5, 1133 a 25—b 22.

四 キュニコスの理想像について

われわれはキュニコス主義の本質を解明するために、テオプラストスの『カラクテレス』のひそみに倣って、ディオゲネスの性格描寫を試み、機警なかれの言行を紹介してきたが、その歸趨としてのキュニコスの理想像について、なお語るべき若干のことが残されているように思われる。

クセノプオンはかれの『饗宴』において、アンティステネスをして次のように語らしめている。それは、無一

物に近いかれがなぜ財産をもっていると自慢するのか、とソクラテスに聞かれたことに對するかれの反辭であつて、そこにはディオゲネスに精神的革命を招來したキュニコスの生活信條が直截に表明されている。

みなさん、わたしの考えるところでは、ひとびとが金持であつたり、貧乏であつたりするのは、家財の多少によるのではなく、そのひとの心のもち方によるのです。というのは市井の多くのひとびとは非常に澤山の財産をもつていながら、自分をひどく貧乏していると考え、富を手に入れるためにはあらゆる苦勞や危険も辭せないほどだ、ということを知つては見ているからです。わたしは等しい遺贈を受けた兄弟を知つていますが、一人の方はその分け前で充分で、使つてもなお残りがあるのに、他の一人はまるで足りないのです。またわたしはひどく財産に餓えていて、最も窮迫したひとたちよりも、ずっと恐るべきことをやつてのける僭主たちのことを聞いています、というのは窮迫したひとたちが盗みをしたり、家に押し入つたり、ひとを奴隸に賣つたりするのは、まさに窮乏のゆえなのです。僭主たちのうちには、財貨のために、民家をすべて破壊したり、民衆を皆殺しにしたり、またしほば國家全體をすら奴隸化したものがあるからです。ですからわたしなどはこうしたひとたちとちのりともなく悪性な病氣に全く同情するのです。というのはかれらはさ

んざん飲んだり食ったりしながら、しかもちつとも満腹しないひとと同じような悩みをもっている、とわたしには思われるからです。ところがわたしは自分でもそのすべてを見つけて出すことができないほど、それほど澤山もっているのです。ですが、わたしにはそれほどあっても、もはや空腹を感じなくなるまで食べることもできるし、もはや渴きを感じなくなるまで飲むこともできるし、またここにいる富豪のカリヤスにもひけをとらずに、外で寒さを感じないほど着物をきることもできるのです。家にいるときには、壁はきわめて温い肌着であるように思われ、屋根はとても厚い毛布であるように思われ、寢臺はいえ、朝起き出してくるのがひと仕事になるほど満足なものなのです。わたしの體に性的な欲望を満足させる必要があるようなときなどは、手近なもので間に合うので、したがってわたしが交渉をもつ女たちは、他の人はいだれもかの女たちに近づこうとしないために、わたしにとても好意をもってくれるのです。とにかくこうしたすべてのものはわたしにはとても快的なものに思われ、それらのどれを行っても、これ以上の快感を味うことは不可能なほどで、むしろもっと快的でないことを願うほどなのです。つまり、これらの或るものは望ましい限度を超えたほどの快感なのです。ところがわたしの富のなかでわたしのもっている最も價値のあるものは、たとえだれかがわたしの現在の所有物を奪っていったとしても、わたしに充分な日々糧を供給してくれることができないほど嫌な仕事をわたしは見ることができな、ということなのです。というのはわたしは楽しみみたい

と思うときには、市場から高價なものを買ってくることはできませんが（それは浪費になるものですから）、魂によってそれをまかなうことができるからです。たとえば、わたしは今たまたまここにあるタソスの酒を、喉が渴いてもいないのに、飲んでいながら、あなかもそのようにひとが高價なものを、用いる場合よりも、必要なものを期待して、それにありつう方が快樂の點では、ずっとすぐれているのです。そしてまた高いものよりも廉いものをめざす者の方が、ずっと正しいのも當然です。なぜなら大低の場合に、手許にあるもので間に合わせる者は、他のひとのものを欲しないからです。またこの種の富は、ひとを氣まえよくすることは注目に價します。というのはこのソクラテスは——わたしはかれからこの富をえたのですが——わたしに、數や重さで計って與えてくれたのではなく、わたしがもつことができるだけを、そっくりわたしに提供してくれたのです。だからわたしも今たれにも物惜しみをしないで、すべての友人にありつうだけを示して、わたしの心のなかにある富をたれでも欲しいひとに分與するのです。しかしわたしは最も貴重なもの、おわかりでしょう、わたしにいつも暇があるということ、すなわち觀るねうちのあるものはいつでも觀たり、聴くねうちのあるものはいつでも聴いたり、とくにわたしにとって最もありがたいことは、ソクラテスと一日中一緒にいて時間を潰すようなひまがあるということなのです。

われわれは絛上のアンティステネスの演説から、キュニコス主義の綱要ともいふべきものを引き出すことができる。かれは哲學から何をえたかと問われて「自己と交わる能力」と答えたと言われるが、幸福を約束するのは物質的なものではなく、精神的なもののみでなくてはならない。山なす財寶もサルダナパロスのな享樂も、足ることを知らぬものには、かえって不幸の原因となるであろう。欲望の充足よりも、むしろ欲望の克服こそ眞の淨福な生活の指標なのである。ひとはディオゲネスの奇矯な樽の生活や傍若無人の放言に眼を奪われて、かれの眞意を見失いがちであるが、それは決して文化そのものの否定ではなく、文化の頹廢の否定なのである。アンティステネスが「賢者は既存の法律によってではなく、徳の法によってのみ政治に參與するであろう」と揚言し、ディオゲネスが「貨幣の改鑄」を自ら實踐したのも、すべて人間のあるべき相を徳(ἀρετή)にそして自足(αὐτάρκεια)に歸せしめようとする試みに外ならぬのである。自足のみが魂の安靜(ἠρεσκεία)を齎し、またそこから言論の自由(ἐλευθερία)も保證されるからである。

しかし自足の生活は決して單なる觀想や坐臥の間に與

えられるものではない。それはきびしい鍛練(ἄσκησις)と苦行(ἄσκησις)とを要求する。ディオゲネスによれば、鍛練には肉體的なものと精神的なものとの二つの種類があり、前者はたえざる練習によって、直ちに徳のある行為に移りうるような感受性を養うことであるが、それはつねに精神的な鍛練を豫想し、それを伴うことなしには不可能である。またアンティステネスが力の象徴たるヘラクレスを自己の理想像として、それを主題にした三卷の書物を著わし、そのなかで次のように語ったと言われるのも、同じ意圖に出るものであろう。

「幸福のためには徳をもって足り、ソクラテスのな力(Σοφίας δύναμις)以外の何ものも必要としない。徳は行為に關することがらであって、該博な言論や學問のことからではない。」

そしてこのような自足の生活を徹底して逆説的に生きるとき、ディオゲネス的な無恥(ἀναίδεια)の業が巧まざして行ぜられることになるのであろう。プルタルコスが『モラリア』において、アレキサンドロスをして「余も、ディオゲネスのごとく、貨幣を改鑄し、ギリシヤの國制をもって異邦を改鑄せねばならぬ」と叫ばしめたの

も、決して理由なくしてではないのである。(1)

このときわれわれは何故にディオゲネスが生國を問われて、昂然と「おれはコスモポリテースだ」と答えたのか、と訊ねる必要があるであろうか。あらゆる傳統と慣習とを棄てて、ひたすら自然に生きようとしたかれに、國家という境域がはたして何を意味しえたであろうか。

かれは『國家論』において、結婚を否定し、女と子供との共有を主張したと言われるが、これもかれのキュニコス的な生活態度から當然の歸結であつたであらう。(2)

「わたしを見るがいい、わたしは家もなければ都市もなく、財産もなければ奴隷もない。わたしは地上に眠る、わたしは妻も子もなく、小さな官邸もなく、ただ地と空とそれから一枚の襦袢服があるだけだ。しかしわたしに何が缺けているか。わたしは悩みがないではないか、わたしは恐怖がないではないか、わたしは自由ではないか。君たちのなかのたれかが、わたしが欲しているのに手に入れそなかったり、避けているものにはまりこんだりしたのをいつ見たことがあるか。わたしは神もしくは人をいつ非難したか。わたしはたれかをいつ咎めたか。わたしが陰氣な顔をしてるのを君たちのなかのたれ

かが見たとも言うのか。また君たちが恐れたり、驚いたりしているひとびとに對し、わたしはどのように應對してらるらうか。奴隷に對するようにはないか。わたしを見て誰か自分の王や主人を見るように思わないものがあるか。」(3)

ここにわれわれはキュニコスのな理想像を見るのである。

- (1) Symposium IV 34—43. Fr. G. A. Mullach; Fragmenta Philosophorum Graecorum. Vol. II. p. 285 f.
- (2) Diog. Laert. VI 6.
- (3) Diog. Laert. VI 11.
- (4) Diog. Laert. VI 70.
- (5) Diog. Laert. VI 16—18.
- (6) Diog. Laert. VI 11.
- (7) Plutarchus, De Alexandri magni fortuna aut virtute (Moralia IV) 332 c.
- (8) Diog. Laert. VI 72.
- (9) Epictetus. Dissertationes ab Arriano Diagastae. III 22.

(一橋大學教授)